

骨・筋肉病変

荒 木 力*

X線コンピュータ断層撮影（以下 CT）の頭部における有用性というまでもなく、腹部、胸部においても、その診断能力および限界が理解されるようになり、CTがきわめて有効である臓器および病変と、ほとんど役に立たない領域とが区別されるようになった。骨・筋肉組織は、CT診断においては比較的新しい分野であり、その評価もまだ固定したとはいえない^{1,2)}、その臨床への応用もひろく理解されているとはいえない。過去2年間に、東大病院放射線科で施行された78例の、骨・筋肉組織（四肢、骨盤、肩部、肋骨および脊椎）病変のCTを検討し、その特徴について考えてみたい。

* Tsutomu ARAKI 東京大学医学部・放射線科